



## 藤川 賢教授 (専攻 性現象論)



### (1) 社会学とはどのような学問とお考えですか。

---

社会学とは何かという問は難しいのですが、「社会」の学問という意味では、次のような特徴があるように思います。一つは扱う対象が社会的であることです。社会学は、ものではなく、社会関係や社会意識のなかで行われる「行為」の様式や意味、規則性などを考察の対象にすることが多いようです。ものを論じるときにも、背後にある意味を考えようとしています。

第二に、法学や経済学などと比べて特徴的なのは、説明の方法が社会的だということです。社会学では、法律や経済法則といった基準に従って対象を分析したり判断したりすることは少なく、それらでは説明のつかないことを、しかし、社会のなかで合理的に理解できるものとして説明することをめざすものだと考えられます。正解よりも最善を求める学問と言えるかもしれません。

したがって、第三に、社会学には「社会のなかでの学問」という特徴があると思います。これは基本的にはすべての科学に共通することですが、社会学ではとくに、あらゆる理論や説明の基盤として、社会の存在が必要になります。また、社会のためという意識も強くなります。現実との係わりが意識され、社会的な実践に資するという面が強まると思います。

とは言え、社会の範囲や定義は初めに決められたものではなく、行為や考察のなかで出てくるものです。社会に係わるというのは、直接的な意味でのことだけではありません。実際に社会学の勉強を続けるなかでは、社会の範囲をそれまでの常識からいかに広げていくかということも重要な要素になるのではないのでしょうか。

(2) 先生が専攻されている、あるいは、この大学で学生に教えられている社会学とはどのような学問ですか。

---

自然環境という言葉で示されるように、長い間、環境に関する諸々の事象を扱うのは自然科学の領域であるとされてきました。しかし、今日では、環境問題に関する多くの社会科学の研究が進められています。それは、環境に関する世界的な関心が高まったことと、環境問題の解決のためには科学技術の発達を待つだけでは不可能だという認識が広まったことによるものだと思います。

自然環境に関することでも、それが社会的な事柄としてあらわれてくるときには、多くの社会的行為、社会関係、社会的背景などが係わってきます。地球温暖化といった地球規模の問題でも、その被害の様子や責任のあり方は国や地域によって大きく違いますし、問題解決に向けて日常生活における実際の行動を変えていくためにはどうすればよいのかを考えることも重要です。

たとえばゴミについてみると、都会で出たゴミが過疎地や遠くの地方で問題を起こすのはなぜか、汚染による問題が起きたときに地域にはどのような被害が生じ、どのように拡がっていくのか、それらの地域の人たちは問題解決に向けてどのような活動を行っているのか、その人たちの主張はどうすれば都会の人たちの耳に届き、分かってもらえるのか、それに対してゴミを作り出している企業や消費者にはどういう係わり方が可能なのか、といったことなどが、社会的な課題として浮かび上がってきます。

社会学では、それらについて、実際に被害を受けた人や解決に向けた活動を行っている人たちや行政、企業などの動きや考えを学びながら、ある意味ではそれらの人たちとともに、考えていこうとします。とくに、様々な意味で弱い立場の人たち、被害を集中して受ける人たちの声に留意し、社会的公正の実現をめざすことは社会学的研究の目標の一つだと言えるでしょう。

ただし、それは一つの立場に深く根ざすという意味ではありません。環境に関する問題は、離れた地域、外国、あるいは未来の世代などとの深い関連を持っています。一見すると遠い世界について学び、視野を広げ、自分たちの社会とは何かについて考え直すことも、社会学による研究の意義を深めることだと考えられます。

### (3) 1～2年次で読んで欲しい本

---

1. 『日本の下層社会』(横山源之助 岩波文庫 1949) 日本の社会調査およびルポルタージュの古典です。難しいものではありませんし、悲惨さが強調されたようなものでもありません。視点や方法など現代に役立つ部分も多いと思います。
2. 『忘れられた日本人』(宮本常一 岩波文庫 1984) 遠い土地を旅しながら、時間をかけてそこにすむ人たちの話を聴いていた、民俗学調査の記録です。登場する人々が魅力的に感じられます。
3. 『須恵村の女たち』(R・スミス、E・ウイスウェル 御茶の水書房 1987) 昭和11年頃の熊本県の一農村に一年間暮らして書かれた、アメリカ人女性による女性たちの話です。戦前の社会について、日本について、農村について、女性についての常識をくつがえす力を持った本でもあると思います。
4. 『流れる星は生きている』(藤原てい 中公文庫 1976)  
1949年に刊行されてベストセラーとなり、今も読み継がれている

本です。敗戦後の満州から1年がかりで脱出しようとする母の記録というだけでなく、生活、差別など多面にわたる洞察に満ちています。

5. 『都市と農村』(柳田国男 ちくま文庫『柳田国男全集29』1991 他に所収) 柳田国男は、ぜひ読んでもらいたい著者の一人です。『遠野物語』も有名ですが、こちらは文学的な色彩が強いため、社会科学的な視点からはかえって読みにくいかもしれません。そういう点では「都市と農村」は講演記録をもとにしていることもあって比較的、文脈を追いややすく、歴史的視野から地域を考える方法について学ぶには分かりやすいものだと思います。
6. 『ストリート・コーナー・ソサイエティ』(W・ホワイト 垣内出版 1974) 若い社会学者が、町の若いギャング集団に加わってその社会関係について記した本です。グループ内での地位が低い少年はボウリングでも高得点をとれないのはなぜか、といった考察は具体的で、読みやすくおもしろいものとしてもおすすめてできます。
7. 『沈黙の春』(R・カーソン 新潮文庫 1992) 大量の農薬の結果として鳥の声のしない春が来るかもしれない。環境問題への警鐘を鳴らしたものとして有名な本です。
8. 『環境社会学のすすめ』(飯島伸子 丸善ライブラリ 1995) 環境社会学とはどういう学問なのか、環境問題と呼ばれるものとしては実際にどういうものがあるのか、それについて学ぶにはどのような方法があるのか、といった点に関する入門書です。著者自身が行ってきた調査などの記録に基づいて書かれていますので、分かりやすく読めます。
9. 『苦海浄土』(石牟礼道子 講談社文庫 1972) 水俣病に関するもっとも有名な本です。水俣病そのものについてというより被害を受ける人たちの、時には美しいと感じるような言葉や行動や生活の様子を語っています。ぜひ、読んでみてください。三

部作の続編にあたる第二部『神々の村』、第三部『点の魚』も単行本や全集で出ています。

10. 『もう「ゴミの島」とは言わせない』(石井亨 藤原書店 2018)

香川県豊島は、1990年ごろに日本各地で頻発した産業廃棄物問題の代表例であり、2017年に廃棄物と汚染除去の全量撤去が「完了」しました。画期的な住民運動の中心で「翻弄」された筆者の記録は、環境や地域を見るための視野を広げてくれると思います。

#### (4) 3～4年次で読んで欲しい本

---

1. 『社会理論と社会構造』(ロバート・K・マートン みすず書房

1961) パーソンズと並ぶアメリカ社会学理論の代表的人物による代表作です。通読するのはたいへんかもしれませんが、「中範囲の理論」「自己成就的予言」など聞き覚えのある項目を拾い読みするだけでも伝わってくるものは少なくないはずです。手に取るだけでも、その価値はあると思います。

2. 『社会学の根本問題』(G・ジンメル 岩波文庫 1979) 社会学とは何か、という問に関する古典です。やや哲学的な内容ではありますが、とくに第一章は前提となる知識などがなくても理解しやすいと思います。

3. 『経済学・哲学草稿』(K・マルクス 岩波文庫 1964) マルクスの初期の著作です。マルクスの理論を追うという以上に、社会科学を学ぶことの意味を考えていく上で参考になる本ではないでしょうか。

4. 『十九世紀の思想運動』(G・H・ミード 人間の科学新社 2017) アメリカのプラグマティズム社会学者の代表的人物の一人であるミードの講義録です。近代哲学の解説ですが、科学や哲学の流れを産業革命や市民社会成立といった社会の動きの中で位置づけており、近代社会を理解する上でも役立つと

思います。『近代西洋哲学の流れ』（講談社学術文庫）など別訳もあります。

5. 『市民の科学をめざして』（高木仁三郎 朝日新聞社 1999）  
著者は、新進気鋭の原子物理学者から、大学の職を辞して、原発について市民の立場で考えるための「原子力市民情報室」を立ち上げ、その活動に半生を捧げました。高木さんには入門書から専門書まで原子力に関する多数の著作がありますので、それらにも触れていただければうれしいです。本書は、そうした活動の末に高木さんが残したメッセージともいうべきもので、私たちの生活と先端的な科学技術との関係を考え直すことを訴えています。
6. 『チェルノブイリの祈り』（スベトラーナ・アレクシエービッチ 岩波現代文庫 2011）  
原発事故を知るためにも、環境汚染と人間とのかかわりを考えるためにも貴重な記録です。広島・長崎や福島など、日本の経験を考える上でも感じられるものが多いと思います。
7. 『原発震災と避難』（長谷川公一・山本薫子編 有斐閣 2017）  
福島原発事故に関する社会学的な考察の中で、おそらくもっともまとまりと読みやすさを兼ね備えた書籍だと思います。タイトルや刊行年からも分かる通り、事故そのものより、事故後の現状を知り、考えるのに役立ちます。
8. 『自由と経済開発』（アマルティア・セン 日本経済新聞社 2000）  
数多いセンの著作の中でも、もっとも読みやすく、また、貧困や不平等のことを広く考えるのに適しているように思います。基本的なテーマは南北問題のような国家の格差や政策ですが、発展や格差や豊かさなどへの幅広い関心に応えてくれる一冊です。
9. 『脱「開発」の時代』（ザックス編 晶文社 1996）  
副題は「現代社会を解説するキーワード辞典」で、「開発」「環境」「平等」「援助」「市場」など19のテーマについて、9カ国17人の筆者

が書いています。たとえば「発展＝開発」という言葉が「途上国＝低開発国」という発想とともに生み出されてきた経緯などへの記述は、知識を得るためというより、考えるための手がかりになるのではないのでしょうか。知識や理論の上に立ってではなく、目の前にあって共有できる現実から議論を始める方法を教えてくれるようです。

10. 『データ対話型理論の発見』（グレイザー、ストラウス 新曜社 1996）調査データから普遍的な「フォーマル理論」を生み出すにはどうすればいいのか、というのが本書のテーマです。原書の出版は1967年ですが、現代に通用する鋭い指摘を持っていると思います。とくに、質的な調査によって何らかの新しい考察を求めている人には触れてもらいたい一冊です。

**(5) 先生の代表的な著書または論文を二つか三つ教えてください。**

- 
1. 『公害被害放置の社会学』（飯島伸子・渡辺伸一・藤川賢著 2007 東信堂 372頁）
  2. 『公害・環境問題の放置構造と解決過程』（藤川賢・渡辺伸一・堀畑まなみ著 2017 東信堂 322頁）
  3. 『放射能汚染はなぜくりかえされるのか』（藤川賢・除本理史編著 2018 東信堂 206頁）